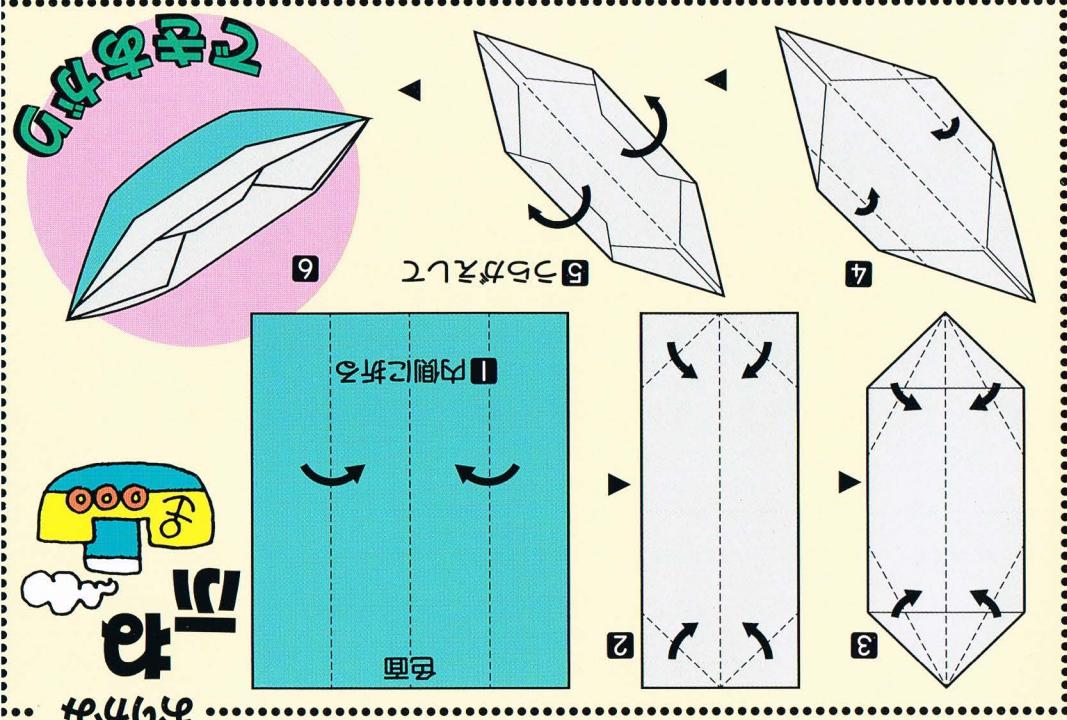


ほじけの子



報恩講

毎年、秋の暮れになると寺で大勢の人が集まります。『報恩講』と呼ばれるこの行事は、古くからあるお寺の行事です。人々がお寺でお詫びをして、お供えを貢献する儀式です。お寺では、多くの人達がお詫びをして、お供えを貢献する儀式です。お寺では、多くの人達がお詫びをして、お供えを貢献する儀式です。

恩 徳

—ありがたいということ—



いまから七五〇年ほど前の十一月二十八日、親鸞さまは九十年の
ご一生を終えられました。

その親鸞さまがご生涯をかけてあきらかにしていただいた教え
を聞き、「ありがとうございます」と感謝するのが報恩講のおつとめ
です。

私たちが「ありがとうございます」と言うのはどんな時でしょうか。自分の
欲しいものが手に入った時、自分の願いごとがかなつたときなど、
自分が何か得をした場合だけではないでしょうか。自分の損得をも
のさしにして、ありがたいか、ありがたくないかを判断しているの
です。

ところが、このものさしほど当てにならないものはありません。
状況によつてコロコロと変わるからです。欲しくてたまらなくて買
つた物でも、時間がたつてみれば部屋の片隅にゴミのようにはつた
らかしにされている、ということがよくあります。買つてくれた人に
「ありがとうございます」と言つたことなどは、とつくに忘れてしまつてい
ます。

自分にいのちが与えられたことを「ありがとうございます」と感じたことの
ある人は、どれほどいるのでしょうか。多くの人は、自分が生きて
いることをあたりまえのように思つて いるのではないで しょうか。
しかし、自分で心臓を動かすことができる人は一人もいません。ま
た、いやなことがあつても、心臓は黙つて打ち続けてくれています。

そのような、私たちが日ごろ考えたこともないようないのちの意味
味を教えてくださつたのが親鸞さまです。すべてのものが平等に尊
いのちを与えて いることを示され、傷つけ合うことがどんな
に悲しいことであるかを教えてくださいました。

親鸞さまは、私たちが欲しがつて いる物を与えてくださるわけでは
はありません。私たちが損得のものさしを超えた世界に生きること
を願つておられるのです。報恩講をおつとめするのは、親鸞さまの
教えを聞いて、そのような世界に生きる者となるためです。

